

<全体分析>

試験時間 90 分

<p>解答形式 論述式・記述式</p> <p>分量・難易 (前年比較)</p> <p>分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)</p> <p>難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)</p> <p>出題の特徴や昨年との変更点</p> <p>I・IIがアジア史中心、III・IVが欧米史中心という出題範囲の大きな枠組みに変化はない。 小論述問題は、昨年度は1問のみであったが、今年度は多く出題された。</p> <p>新課程を踏まえた出題</p> <p>本学では従来史料の読み取り問題はほとんど出題されてこなかったが、今年度は3カ所で出題されていた。 問題の文章を読み取り、それを踏まえた上で解答を作成する必要がある論述問題が出題されていた。</p> <p>その他トピックス 大問Iは2024年大学受験科『世界史 演習編』基礎シリーズとズバリの中。</p>

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	オスマン帝国のヨーロッパ諸勢力との抗争と支配領域の変化	15世紀中頃から17世紀末に至る、オスマン帝国とヨーロッパ諸勢力との抗争と、それによるオスマン帝国の支配領域の変化について、2度のウィーン包囲とその帰結に言及しながら説明する300字論述。15世紀中頃と17世紀末がそれぞれ何を指すのか分かったら、書くべき方向が見えるだろう。	やや難
II	A 記述	北京の歴史	戦国時代から清の北京史をテーマに、同時期の中国史を中心に問う。(11)は史料文(ハーフィズィ=アブルー『バイスングルの歴史精華』)を利用した問題だが、読まなくても解けたらう。	標準
	B 記述	中国とロシア・ソ連との関係	19世紀から第二次世界大戦後までの中国とロシア・ソ連との関係をテーマに、同時期の中国史を中心に問う。(22)は史料文(中ソ友好同盟相互援助条約、1972年の米中共同コミュニケ)を読み取る必要がある問題だった。	標準
III	論述	スペインによるラテンアメリカ植民地の経営	16世紀から18世紀に至るスペインのラテンアメリカ植民地経営の特徴とその変遷について、労働力の供給源の変化に留意しつつ説明する300字論述。アジア産商品とラテンアメリカ産商品の具体的な対比は、何を書くべきか迷う。	やや難
IV	A 記述 論述	農耕のあり方 (古代・中世)	古代オリエントや古代地中海世界、中世西ヨーロッパにおける農耕のあり方をテーマに、社会経済史を中心に問う問題。小論述問題が3問あり、難易度は標準的。	標準
	B 記述 論述	近代憲法	近代憲法をテーマに、19世紀から20世紀前半にかけての世界を問う問題。史料文(アメリカ合衆国憲法とチェロキー国憲法)から読み取れるチェロキー国憲法の特徴を3つ挙げる(14)、Bの文章を踏まえて論述する(18)(ア)が難しい。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

<p>300字論述問題は、近年、テーマ性が高い問題が増加しており、問題の要求を正しく捉えて的確に答える必要がある。論述問題の出来が世界史の得点を左右するだけに、普段から時間軸(時期)・空間軸(地域)を意識した学習を心がけよう。例えば、「時間軸」については歴史事象の因果関係の理解に力点をおきながら、「歴史の流れ」を正確に把握する学習を進めること、「空間軸」については歴史地図を活用した学習を心がけることなどが重要であり、これは記述問題対策としても有効である。記述問題については細かい問題が見られることもあるが、全体としては高等学校の学習範囲を越えるものではないので、教科書の内容を古代から現代まで「穴」のない学習を心掛けるとよい。また、中国史やイスラーム史、古代ギリシア・ローマ史など特定の地域・分野が毎年出題されているので、過去問の研究を進めることは、有効な学習対策となるだろう。</p>
